

ひとつの青

O k a c h i T o s h i a k i

岡 地 俊 明



短編集

ひとつの青

岡地俊明

ひとつの青

♪

向こう側から、ぼやけた低い音が断片的に聞こえてくる。そして、それと同時にマンションの壁がほんのわずかな時間照らされて明るくなる。一本の路地を基準にきっちり整理され

た一軒家が両サイドに建ち並び、古ぼけた音楽やテレビの音やシャワーを浴びる音などが微かに聞こえてくる。平屋建ての家からは魚をこがしたような匂いがしてきた。外灯がちやうどその家の目の前にあるので、蛍光灯に照らされた古びた平屋建てはお化け屋敷を思わせた。雨に何十年も打たれたブロック塀の向こうからは、虫が時々鳴き、すぐに声をひそめた。私は虫のことを考えてみた。考えてみるとこっちに越してきてから、鈴虫の鳴き声を一度も聞いていないなど私は思った。鈴虫の音色よりも、自動車のクラクションやエンジンの音になってしまった。

もうしばらく歩くと、家の数が急に激減し、町工場が多い地域になる。既に額からは汗が噴き出し、インテリアショップのアルバイト帰りで疲れているせいもあって、このままここで寝込んでしまいたいほどにくたくたになってしまった。それでも、最近アルバイト先の近くのお店で買ったフーシャ色のクロックスの斬新なデザインで出来たビーチサンダルを見下ろすと、少し元気になった。それに外灯に照らされるたびにピンクのTシャツを見ると、涼しげな気持ちになり、はじめとした暑さを吹き飛ばせるような気がした。Tシャツには *Im gorgeous* とホワイトで書かれていて、その下には大きな真つ赤なハートが三つ並んでいる。

そういえば、今日はお気に入りのスタイルだ。ミニスカートは黒地のジーンズ素材で程良くタイトで腰回りがダメージ加工しており、裾周りは、幼稚さを思わせない程度のグレーのレースフリルが施されている。ベルトは二つ穴で透明なものを巻いている。腕には真っ白のデジタル時計をしている。右手には *tendor lover* のホワイトブリュレのバックを持っている。

正面から歩いてくる上下ジャージ姿に眼鏡をかけた中年男性とすれ違った。目線を感じつつも私は下を向きながら歩いた。こっちに來てから、あまり人と目を合わせなくなつた。昔なら、自然と正面から歩いてくる人と目を合わせることぐらい何でもなかつた。だが、今はそれすら怖くてできない。環境の変化もあるだろうし、何より失つた物が大きすぎる。私は確かに変わった。変わっていないのは二年とちょっと前から切っていない髪の毛だけかもしれない。そのままだと重たくなってしまうので、すいたりはその基本的には長さは一センチも変わらない。それに染めてもないので、相変わらず黒くて軽い猫っ毛のまま。髪の毛だけが外的物質で私と彼を繋ぐ唯一のザイルなのだ。心はいつも一方的ではあるかもしれないが彼と繋がっている。

後ろから、自動車の音が近づいて來て、わたしは端に寄つた。自動車が通るだけで心臓が

どくつと鈍い音を立てた。もう一台来た。それも通り過ぎると、さつきよりも辺りがしんと静まり返った気がした。

川沿いの道に来た。後、四、五分程度歩けば、私が住む1DKの木造アパートに着く。時計を確認してみる。

十時三十五分。辺りが静かなのは当たり前だ。いつもなら、朝から夕方までのアルバイトなのに、今日は先輩が私用があるといってお休んでしまったので、私が変わりに出勤したのだ。夜に一人で外を歩くのが、こんなにも寂しいことだとは思わなかった。散歩ならば、その時の気持ちがあるから別物と考えて、仕事帰りに歩くというのは寂しさと同時に大人の自覚を感じさせ、更には会社勤めしている親の気持ちが少し分かったような気がした。それが若さとの別れを匂わせ、大人から見たらまだまだ若輩者で若干二十歳の私が老いを感じてしまった。そう考えると余計に寂しくなり、頭の中であつという間に老けていく自分の姿がリアリティーに思い描かれた。やれやれと私は思った。そして、闇にも溶け込まないような重たいため息をついた。

夜空を見上げてみた。こっちの空は不自然に明るいし、障害物が多いせいで、星がちつと

もみえない。きつと彼と私が見上げている空は同じでも表情はまるで違うものだろう。私はうつむいて歩いた。すると、楽しそうに会話している声が聞こえてきたので顔を上げてみると、浴衣姿の女の子と甚平姿の男の子が前から歩いてきた。そういえば、お店に来た女子高生が何処何処でお祭りがあるとはしゃいでいたのを思い出した。二人はお祭りの帰りなのだろう。女の子は彼氏の顔を覗きながら、団扇を仰いでいる。二人とも私と同年代だ。男の子が女の子の視線に気が付くと、膝を折っておでこにキスをした。

私は呆然として、アスファルトの劣化した所につまづいて転びそうになった。じわりと目頭が熱くなり、いいようなない怒りが込み上げてきた。それがカップルに対して向けられた物なのか、自分の存在の虚しさに向けられた物なのかは感情が乱れたせいでわからなかった。私は本来なら、カップル側の立場だったのだ。私は特別なおしゃれをして彼と夜の道を寄り添いながら、歩いていたはずなのだ。どうして、私は独りぼっちになってしまったのだろうか。どうして、彼の顔や声はぼやけ始めているのに、思い出は色を濃くしていくのだろうか。

私は何度も彼の事で泣いた。水分を補充しなくても、好きなだけ涙は溢れた。こっちに越してきたときは、早く都会になじもうと思つたし、専門学校で新しく出逢つた人達の前で哀

しい顔ばかりしてはいられないので、無理にでも笑顔になれた。でも、静かな部屋に戻ってくると、習慣のように涙に明け暮れた。彼といた頃の涙は今思えば幸せな味だったのかも知れない。今も涙が急にすうっと流れ始めた。目の前が滲み、外灯の光がぼやけて見えた。胃が痙攣を起こし始め、涙は一層激しさを増す。私は川沿いの腰まであるフェンスに両手をつけて足を止めた。悲しみのあまりに動けない。自分を見失ってしまった。涙は鉛色に変わった河に降り注がれ、溶け込んでいく。私の涙は海に運ばれるのだろうか。それでも、私の涙では、鉛色の海をあの頃の青い海には変えられないだろう。

私を動かして、誰か私を動かして。動けないよ！

心の中で悲願してみるが涙は一向に止まらない。

膝がぐくつときて、その場にしゃがみ込んでしまった。右手に持っていたバックは地面にどすつと落ちた。自分の涙でTシャツが濡れ、ピンク色は濃さを増した。私はどんな形だろう？ 悲しみ包まれ哀れな一人の女の子。彼と別れてから私はずっと形を変えられず悲しみという形に固まってしまった。私はずっとこのままの形で生きていかなくはないのか。私は無理に笑って人と接しなくてはいけないのか。

私は動きたい、でも……

黄色い光がこっちに向かつて来たので私ははっと思っ、急いでバックから携帯電話を取りだして、話しているふりをした。自動車が静かに通り過ぎていく。携帯電話を耳から話すと、淡い桃色の貝殻ストラップが電話に当たり、軽くて乾いた音が鳴った。私はもう一度、河を見下ろしながら、二、三回深呼吸をした。気持ち徐徐に落ち着いてくる。そして、嫌な物を吐き出すようにため息をつく。

帰ろうと姿勢をしゃんとしたとき、ちょうど手に持っていた電話にメールが送られてきた。受信ボックスを開くとバンドメンバーからだった。

明日のストリートライブ頑張ろう。ただでさえ暑いけど、うちのロックでみんなをもっともつとあつくしてやろう。じゃあ、また明日！ あつ、そうだ。明日終わったら、こないだ話していた特大バナナパフェ、みんなで食べに行こう！

私はうんと頷いて、自然と笑顔になれた。



七月の初めなのにせっかちな蝉が駅の脇にある雑木林からけたたましく鳴き叫んでいる。私と特別な彼は強い日射しを避けるために、今にも崩れてきそうなクリーム色の塗装が剥げた木造屋根の下に立ちながら、電車を待っている。彼と私はちょうど十センチ身長差があつて、私は少し見上げながら、彼と会話を交わしている。今日は学校帰りに二人で本屋さんに寄つて、私は従姉妹の子供に誕生日祝いで絵本を買つてあげることにした。

彼と私は同じ高校に通う受験を控えた三年生で、今日はテストだったから、午前中で学校は終わり、いつものようにグラウンドの鉄棒の横にあるベンチで待ち合わせをして一緒に下校している。彼とはクラスが三年間別々だったが、ちよつとしたきつかけから仲良くなり、交際するまでにいたつた。私は本屋に着くと彼のことも忘れて片っ端から絵本を手にとつては頭を悩やませた。絵本を手にするのは実に小学生の中学年以来のことだった。彼はお店の中

をゆつくりと一周し終わると「いいのあった？」ときいてきた。

「よく、わからない」

「おれも探すよ。おれもよくわからないけどさ」

彼はそういうと私が開いている絵本を一度覗き込んでから、選び始めた。しばらくすると、見るにみかねたのか店員さんが近づいてきて、「何かお探してしようか？」と訊ねてきた。私
が声をかけられるのが 苦手だと彼は知っているので「大丈夫です」ときっぱり断つてくれ
た。

「決められないね」私は言った。

「じゃあさ、目をつぶって、人差し指が止まった物を買うっていうのはどう？ もう、おれ
も子供心忘れちゃったから、選べないわ」

「そうしよう。私もわからない」

「じゃあ、目つぶって」

彼は囁くように静かに言って、私の手を軽く誘導した。

「これ！」わたしはそう言って目をぱつと開いた。